

ミステリ読書案内

2023. 8. 8 発行元

第504号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

最近出た本の中から

最近になって出版された本の中から4冊を紹介する。今回はまたまたシリーズものを取り上げるようになった。書き慣れた作家の定番のスタイル。読む方も安心して読める作品。内容的には今ひとつかな…。

硫化水素の実験

今年も中学校2年生の理科実験「鉄と硫黄の化合」で救急車が出動した話が何回かニュースで流れた。有毒ガスの硫化水素が発生する実験である。卵の腐った匂いが特徴である。私も40年以上やり続けてきた実験。でも救急車を呼ぶような事態になったことはない。

実験にはそれぞれコツがあって、安全にこなすためにはいくつかのポイントがある。教科書にあるように「教室の換気に気をつける」は当

然だが、要は「すばやく、短時間で」に配慮すればよい。生徒の進行状況の把握が大切で、教師が全体をしっかり動かすこと。硫化水素が発生する場面を揃え、班員全員が匂いを確認したなら、直ちに教卓に持ってこさせて試験管を集めてしまう。集めたものはすぐ大量の水で洗えば毒ガスの発生は止まる。元を絶ってしまえば何の心配もいらない。時間にして約3分程度。

実験は、やはり、教師がいかに生徒を指示通りに動かすかにかかっている。それができるかどうか…。

鳴神響一「神奈川県警ヲタク担当 細川春菜5鎮魂のランナバウト」

7月に幻冬舎文庫から出た本。一般の人から捜査協力員として「ヲタク」と呼ばれる人達の専門的知識を生かそうとするシリーズ。今回は神奈川県西部の湖で発見された自動車評論家の他殺体を巡っての事件。よって登場するのは車の話。「旧車」と呼ばれる1980年代以前の自動車が登場してくる。フォルクスワーゲン・ビートルを皮切りに…。愛好家の蘊蓄が延々と続く形はいつものとおり。本書ではその話に3分の2が費やされている。やや年配の人向きのテーマのような気がする。担当の細川春菜はひたすら聞き役に徹する。でも、そんな中から生まれてくる推理の結果は…。

山本巧次「入船長屋のおみわ・隣人の影」

6月に幻冬舎時代小説文庫から出た本。『江戸美人捕物帳・入船長屋のおみわ』シリーズの6冊目。このシリーズはタイムトラベルもないので比較的地味な印象。

今回は長屋に新しく入居した又秀と名乗る人物の話が中心になる。元畳職人だという。物腰が柔らかく、言葉遣いも丁寧。好人物に見えるのだが、どうも畳職人だったとは思えない。お美羽は転居の仲立ちをしてくれた人達に素性を尋ねて回る。そのうちに、又秀の姿が長屋から消え失せ、どうやら人さらいにあったらしいことが判明してくる。本阿弥光悦の焼物が関わった詐欺事件が裏に隠されているようで…。お美羽に近づいてきた智之助と名乗るイケメンが大活躍してくれて…。

加藤実秋「刑事ダ・ヴィンチ」

5月に双葉文庫から出た本。3話収録の短編集。帯に「アート推理」と書いてあったので期待したのだが…。警視庁楠町西署の刑事・小暮時生の視点で描かれる。ある日、人事異動でやってきたのが東京藝大絵画科卒の南雲士郎という人物。黒のスリーピースを着て、深紅のスケッチブックを手放さない。美術品関係を得意とする「刑事ダ・ヴィンチ」。目の付け所がユニークなのは良いが、気まぐれで、捜査上のバディを組む小暮は振り回されてばかり。最初に取り組むのは、居眠り運転で崖から転がり落ちて死亡した事件。南雲はすらすらと絵を描いて提示してくれるのだが…。もう少し美術絡みの方が…。

塔山郁「舌はくちほどにものを言う 漢方薬局てんぐさ堂の事件簿」

7月に宝島社文庫から出た本。これまでは『薬剤師・毒島花織の名推理シリーズ』が5冊出ていたのだが、今回は新しいシリーズになった。今度は漢方を中心にした薬剤師の話。4話収録の短編集。

舞台は「てんぐさ堂」という漢方薬局。調剤薬局でもなく、ドラッグストアでもなく、現在ではなかなか厳しい経営だろうと感じられるところ。店主の奈津美は3人の薬剤師を雇っている。一番最近に雇ったのが宇月啓介。以前は調剤薬局にいたのだが、手足に麻痺があるため、立ち仕事が楽ではなく、カウンセリングが中心の「てんぐさ堂」に職を求めたという。この宇月が来客の話聞き、その悩みを解決していくところが読みどころ。『毒島シリーズ』とは異なり、来客側の視点で描かれている箇所が多いのが特徴。よって、一編ごとに出だしの人物が入れ替わる。ミステリ性よりも、物語性を重視した流れになっている。店主の奈津美も、宇月自身も隠された過去を背負って生きている…。